

風土色
による
色彩学
のすすめ

建築・まち・美しい景観の創造

尾崎真理+佐久間彰三

■目次■

序章	景観の中の色彩とは	4
第1章	風土色論〈風土色とは—その測色と表示方法〉	9
1-1	風土色の定義	10
1-2	風土色に関わる要素	12
1-3	風土色の測色方法	14
1-4	色彩の表示方法	15
第2章	色彩調和論〈色彩の調和とは〉	17
2-1	ゲーテの色彩論	18
2-2	ヨハネス・イッテンの色彩論	21
2-3	「カラーグループボード色彩調和論」	24
第3章	色彩調和論による「景観色彩ガイド」の作成と色彩計画〈美しい街並みの創造〉	35
3-1	都市空間の色彩	36
3-2	色彩計画の手法	37
3-3	調査対象地	37
3-4	「景観色彩ガイド」作成のプロセス	40
3-5	江東区の風土色	41
3-6	現況の街並みの色彩	46
3-7	「景観色彩ガイド」の作成	49
3-8	街並み色彩計画	56
第4章	「カラーグループボード」による色彩計画〈あらゆる環境色彩に適用できる〉	63
4-1	ニュータウンの色彩計画における組織体系	64
4-2	橋梁の色彩計画	66
4-3	美術館の色彩計画	74
4-4	病院の色彩計画	78
第5章	地域特性を表す風土色と街並みの色彩調和	85
5-1	地域特性を表す風土色	86
5-2	街並みの色彩に見る風土色の調和	91
第6章	日本の都市景観における歴史的変遷と課題	99
6-1	日本の都市景観の歴史的変遷〈日本の伝統色はこうして失われた〉	100
6-2	都市景観形成の課題	106

序章 景観の中の色彩とは

■ **美しい景観には決まった色がある**

ヨーロッパには、美しい街並みを形成している都市が随所に見受けられる。それは、パリとかローマ、アムステルダム、チューリヒといった大都会だけでなく、地方の町や村にも見ることができる。家々の窓辺に飾られた花々、美しく手入れされた庭、掃除の行き届いた小さな広場、それぞれに個性がありながら見事に調和している。その一つ一つをとれば、日本の町でも見かけられるが、それが全体として美しい景観を創っているのを見たとき、日本の多くの町との違いを感じる。

1970年頃から日本でも都市再開発が活発化し、新しい都市計画に基づいて、新しい街づくりが行われてきた。そして様々な様式でデザインされた建築、豪華な材料が使われた建築などによる街並みが造りだされてきた。しかし、残念ながら美しい街並みが出来ているとは感じられない。それは何か調和を壊しているからなのである。欧米と日本の街並み景観を比べると、その違いには様々のものが挙げられるが、最も大きな違いは色彩にあると思われる。

パリのシャンゼリゼ大通りと原宿の表参道の街並みを比べて見ると、一目でその違いが分かる。街並みの色彩もさることながら、通りを歩く人の服装の色彩が決定的に違っている。パリジェンヌの服装は、一見非常に多彩に見えるが、実はそんなに多くの色は使われていない。西欧では長い歴史の中で、子供のときから、家庭でも学校でも、美しさ、調和ということについて訓練を受けてきているので、誰もが調和する自分の色を知っているからである。かつて、日本人は着物のかさねを見事に着こなしてきたが、現在では、服装に同じ赤や黄色でも多様な色相のものを使っているため、雑然とした印象を与えてしまうことに

なる。街並みについても同じことがいえ、日本の街並みの景観を壊しているのは、多くの色を無秩序に使っているためである。

■ **美しい街並みを形成する色とは何か**

昔の日本の町は美しく、京都の古い街並みに見られるように、瓦屋根、木戸、障子、白い漆喰の壁、朱色の鳥居、着物の鮮やかさ、すべてが調和し、「日本の美」を生みだしてきた。これは日本の湿度の高い空気、深い緑などが風土に根ざし、千年以上の歴史の中で調和するものが残されてきた結果なのである。

京都の古い街並みや、風格と気品に満ちた寺の佇まいには心を和ませてくれるものがある。南禅寺から哲学の道を通って銀閣寺に向かい、池のほとりから眺める銀閣寺の景観は、京都の美しい景観を代表する一つである。そして銀閣寺の二層宝形造りの美しい楼閣と相阿弥作の庭園が「日本の美」を象徴的に表している。また、その庭園からの視野の中に高層建築が入ってこないことも京都の救いである。しかし、近年の京都の街並みの変化には考えさせられるものがある。景観論争にもなった新しい京都駅や高層ホテルも出来上がってしまったが、遷都千二百年を祝おうとしていた町で、なぜこのようなことがなされたのか。清水寺の舞台から京都の町を見下ろすとき、もうそこには千二百年の歴史を持つ京都の街並みを見ることは難しくなっている。長い歴史が育んできた美しい町を残すことは、そんなに大変なことなのだろうか。

京都には、千年以上の歴史を刻む日本を代表する京都三大祭り(葵祭、祇園祭、時代祭)が受け継がれている。祭りの舞台は街路である。その舞台となる街路の景観に無頓着なのはどうしてなのか。われわれは、伝統的な祭りを受け継ぐと同時に、その舞台となる街路の景観にも意を注ぐ必要があるのではないか。街路を形成する景観は、時代に即して変化しながらも、祭りと調和したものであるべきである。それは総合的な形で伝統的文化が継承されてこそ「美」に対する感性が磨かれ、豊かな発想が育まれるからである。すなわち、町には過去と現在があり、そこから未来が感じられてこそ、文化が生まれ、人々に活

力をもたらすことになるからである。遷都千二百年を祝うということは、次の千二百年の姿に思いを馳せる論議を尽くすことではなかったのではないのか。

西欧には長い歴史を持つ都市が多く、チェコスロバキアのプラハも千年以上の歴史を持つ古い町の一つである。プラハは、歴史のほとんどを他民族に支配されてきたが、チェコの人々は、多種多様な文化を採り入れながら独特の美しい街並みを創り上げてきた。ゆったりと流れるモルダウ川にかかるカレル橋から見た町の景観は、異民族の文化を採り込んで、美しい街並みを創り上げてきた人々の心の豊かさや美的な感性を感じさせる。

これらのことから理解できるように、美しい街並みはその地域から生みだされ、洗練され、定着した色彩が調和して形成されるのである。

■ 色彩の調和は主観では生まれない

美しい景観とは何かという問題は、常に議論され、多くの場合に、美しさというのは主観であって、人それぞれによって違いがあるといわれる。しかし、銀閣寺や相阿弥作の庭園が、日本人ばかりでなく、海外の人々にとっても美しく見えるのは、そこに普遍的な「美」を見いだすことができるからである。もちろん、美しさを認識することは、生まれたままの感性だけでは十分ではなく、文化的な素養も必要である。そして、異なった歴史に対する文化の素養であっても、その素養があるレベル以上に達していなければ、他の文化によって築き上げられたものも正しく評価することはできない。このことは、桂離宮を評価したブルーノ・タウトの例を挙げるまでもないことである。

日本の多くの人々が優れた絵画を鑑賞し、その価値観を共有することなら素晴らしいことで、それこそが文化的な素養であるといえる。また、日本人ほど絵画展に多く出かける民族も少ないように思われる。しかし、その磨かれたはずの美的な感性はどこにあるのか。美術館を一步外に出た途端、その磨かれた感性は、頭の引出しに仕舞われ、帰り道に目に映る街並みや自分たちの家に帰ったとき、そこに美しさを求めようとはしない。

実に、このことが、今日の貧相な都市景観を造ってしまったことに結びついているともいえる。

われわれが美しいものを見、美しいものに触れ、美しい音楽を聴いたとき、なぜ感動し、幸福感を味わうのかは、人間の内に持っている精神の働きなのである。このように美しさを希求するのは人間の本能であり、人間が人間として生活する最も基本的な生活基盤である都市とか町は、美しいものでなければならぬものである。

都市環境デザインには、色彩だけが単独に存在するわけではなく、形や機能、空間のバランス、木々や草花、風や水の流れ、音など自然との調和といった様々な要素があり、人が住む美しい場所を創り出すためには、これらの要素を調和のとれたものにする必要がある。

生活の質は、環境の質によって大きく左右され、その環境を美しく感じたり、醜く感じたりするのは人間の持つ五つの感覚機能の働きによる。その中で、視覚から得られる情報が80%以上に及ぶといわれるように、色彩は美しい環境を構成する最も大きな要素になるのである。しかし、色の問題になると、色は好みによって違い、人それぞれであるということが強く主張されがちになる。建築物の色を決めるとき、多くの建築家やデザイナーは周囲との調和についてあまり考えずに色を指定し、最終的な色は顧客の好み、塗装会社や製品を製造する会社などに任されてしまっている場合が多い。しかも、赤は暖色系、青は寒色系という固定観念と、色の微妙な違いに対する認識のなさが、色彩的にしっくりしない「不調和」な街並みを造ってしまっている。

このため、公共空間における色彩計画を行う上で、好みや個性が発揮できるのは、限定された色彩群の枠内でなければならず、普遍的な美しさは主観では生みだすことができない。

■ 風土の色の抽出とその調和が美しい街並みを創り出す

美しい街並みを創り出すには、大きく分けて次の二つのことが挙げられる。一つは色の抽出、もう一つは色の調和である。

色の抽出は、自然環境とその地域の人間との関わりによって形成された風土の色を読みとることにある。

色の調和については、これまで明確な指針がなく、感覚的に決めてしまってきている。特に日本では、色を色相や明度、彩度という科学的な面を基本としてとらえ、色の持つイメージを橙色を中心として赤や黄は暖色系、青はすべて寒色系と固定的に分類している。したがって、配色の調和について説明しきれずに、結果として、不調和な色の氾濫を生じさせてしまったのである。

詳細は本章に記述しているが、一般的に赤とか青とかといわれている色にも、微妙な違いがあり、実際には、赤にも寒さを感じる寒色系の赤があり、青にも暖かみを感じる暖色系の青がある。欧米や日本の伝統的な街並みに見られる配色の調和を分析すると、色をその性格によって、四つのグループに分類することができる。すなわち、強い寒色系、弱い寒色系、重い暖色系、軽い暖色系に分けられる。これらのグループ内の色を使うことにより、基本的な調和を生みだすことができる。また、対立するグループから対比的にアクセントになる色を合わせることも可能になる。この四つのグループを理解することによって、色彩の調和に成功するのである。

本書は、普遍的な色彩とその抽出法について解説し、色彩調和についての基本的な理論に基づいて、色彩の調和の手法を導きだしたものである。そして、本手法の有効性と容易に色彩の調和を見いだすことができるように、適用した事例および実際の都市の色彩景観について事例を挙げて解説することにした。

しかし、都市景観には、日本の地理的条件や長い年月に培われた民族の人間の特性が深く関わっており、単に手法に関する知識のみでは真の美しさを創造するのは難しく、何より重要なことは、その底流にある哲学や理念に対する深い洞察が欠かせない。このため、日本の都市景観の歴史の変遷に触れ、都市景観形成の課題を書き添えることにした。

1

第 1 章

風土色論

〈風土色とは——その測色と表示方法〉

序章で、美しい都市景観を形成するには、地域が育んできた「風土色」を用い、それが調和されることが基本であると指摘した。

本章では、風土色の定義づけをし、風土色の測色と表示方法について解説する。

の色相は、必ず一つのグループに入るのである。例えば、Cグループに属する落葉樹の緑は紅葉したときの色もCグループにあり、このグループからの色の組合せが調和を生み出すことになる。空や水の色も大きく変化するが、グループの境界線を越えることはなく、景観の背景をなすこれらの色は、補色対比、同時対比や面積対比による調和を見いだす上で重要視する必要がある。また、自然の色の変化がグループの境界線を越えないことは、風土色の調査が必ずしも四季を通じたり、気象が変化するときに行う必要がないことを示している。この自然の摂理に従って色彩を選択することが普遍的な美しさを生み出す基本になるのである。

実際の街並みの色で有効性を検証することにする。

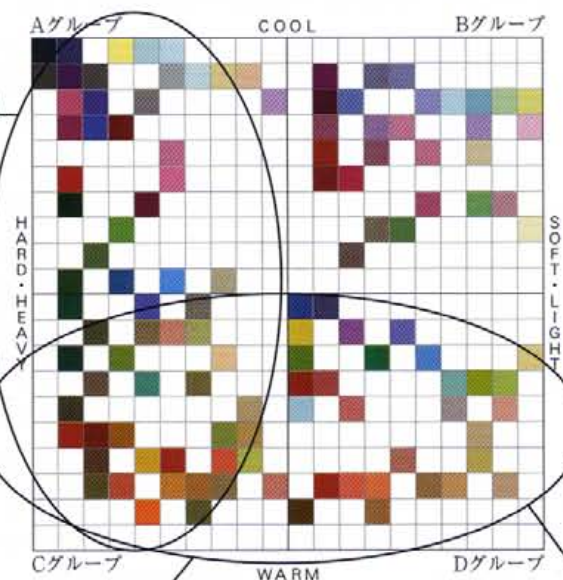
Fig-15は、「カラーグループボード」と美しい街並みに見られる色彩との関係を示したものである。

- ① 飛騨の古川(古い日本の街並み)の風土色はAグループとCグループであり、使われている色もすべてAグループとCグループである。白-黒の明暗対比で明暗が等しいため、重厚で均整のとれた景観を形成している。
- ② ドイツのバーデンバーデンの街並みの色は、この地方の風土色であるCグループとDグループの色である。赤色や青色がアクセントカラーとして適切に用いられているため、落ち着きと格調高い美しい景観を形成している。
- ③ サンフランシスコのアラモスクエアのビクトリアハウスである。この地域の風土色はCグループとDグループに属し、建築に見られる色(パステルカラー)もCグループとDグループの色で、一軒一軒の色は異なるが、風土色から色が選択されているので美しい景観が形成されている。
- ④ イギリスのノリッチのテント市場の風景である。この地域の風土色は、CグループとDグループである。広場を取り囲む建築物は青白い中間色(Dグループ)でまとめられ、マーケットの色相対比のとれたカラフルなパラソル(Cグループ)の輝かしいストライプと併せて、調和のとれた美しい景観を形成している。



飛騨の古川

ドイツのバーデンバーデン



サンフランシスコのアラモスクエア



イギリスのノリッチ

Fig-15 「カラーグループボード」と街並みの色彩

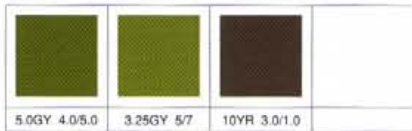


Fig-20 調査表—樹木の色



Fig-21 調査表—花の色

中木の植栽もされている。保存樹木は170本を超え、分布は社寺が多い。種別で見ると銀杏が約50%を占め、榎、楠と続き、広葉樹が多い。樹種の構成を内陸地域と沿岸地域に大別すると、内陸地域には楠、榎、銀杏、桜が多く、沿岸地域にはユーカリ、アカシア、柳が数多く存在している。

3) 花

花は地域の四季を代表し、地域になじんでいる花を調査する。江東区の花である山茶花は、潮風に強く、冬季に暗赤紫の花をつける。海岸沿いにおいて、海や潮との関わりが深く、江東区の立地条件を語る花である。桜は川沿いや公園などにおいて、春を代表するほのかなピンク系の色である。ほかに、荒川河川敷の一面に咲く菜の花や地名にある牡丹、亀戸天神社の風物である藤や梅などが調査対象となる。色相は2.5P～5Y、明度は4.0～9.0、彩度は2.0～14.0と、鮮やかな色が多く見られる。

4) 空と水(気候)

東京都の気候は夏に雨が多く、冬乾燥する太平洋岸気候区に属し、東に荒川、西に隅田川、南は東京湾と三方を水に囲まれているため、東京の中では穏やかな気候を示している。空の色の色相は7GY～3.5PB、明度は2.5～8.5、彩度は0.5～9.0と、幅広い色相が見られる。

現在区内に流れる自然の流路は隅田川と旧江戸川だけで、残りはすべて人

工の運河や水路である。水の色は、臨海部で見られる海の色相は7.5BG～7.5B、明度は4.0～5.0、彩度は2.0～4.0とやや緑みのある青色を呈しているが、運河の水の色相は5GY～5G、明度は2.0～3.5、彩度は1.5～2.5と濃い緑色を呈している。

(2) 歴史・文化環境に関わる色

1) 歴史的建造物

深川北地域では低彩度、中明度の安定した黄茶系を基調とした明るい赤茶系が多く、深川南地域では明るい赤茶系と緑色が多い。また、亀戸・大島地域では濃い茶色が中心となった色みのない無彩度色に近い色が特徴であり、砂町地域では建築材料としてよく使われた砂を中心とした薄い砂色と、木材などの赤みのある濃い茶系が見られる。

2) 工芸品

江戸独楽(朱、黒、金)、江戸切子(赤、青)、江戸更紗(白、赤、紫)、組紐(白、赤紫、淡緑、薄緑、橙)など伝統工芸が現在も継承されている。無形文化財工芸技術として刺繍、石工、塗物、木工などがある。

3) 浮世絵

深川の庶民の姿、農村の風景、街並みの風景などの様子が描かれた画面からは、当時の調和のとれた色彩文化を読みとることができる。深川北地域のものは赤、緑、江戸紫、藍色などの多様な色相が見られ、他の地域より紫や、

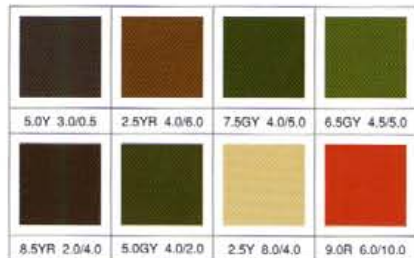


Fig-22 調査表—歴史的建築物の色



Fig-23 調査表—工芸品の色

・建築壁面に取り付けられた大きな広告看板を取り外し、建築壁面のベースカラーをクリーム色(5.7GY 8.9/0.9)とする。

以上、三つのポイントから修正した景観が目標のイメージに近いものとなる。

②庶民的な商店街

商店街には、にぎわい感を出すため、地域にはない高彩度の様々な色が使われ、雑多で乱雑な景観となっている場合が多い。地域の商店街は、地域としての特徴を表しながら、人間味あふれるやさしさを感じられるようにする。

●色彩デザインのポイント

- ・色彩を整理し、建築外壁の色は、当地域の基調色である暖かく、明るみのある黄色(2.0Y 7.2/2.0、2.3Y 7.1/3.0)とする。
- ・日除けは、面積的にサブベースと見なせるので、赤系(9.6R 4.2/3.5)または赤紫系(9.2RP 3.7/2.6)のいずれかに統一する。
- ・にぎわいのある空間を形成する必要があるため、アクセントカラーに地域の色である菜の花(5.2Y 7.9/10.1)を選定する。

広告看板の色や形を整理し、アクセントカラーに菜の花の黄色を用い、日除けの色を赤系と赤紫とした場合の修正景観をそれぞれ示す(Fig-33)。いずれも整然とした佇まいの中に安らぎとにぎわい感のある庶民的な商店街となるが、最終的には、商店の性格や陳列される商品の色彩などの調和を考慮して決めることになる。

フレームカラーやアクセントカラーは、地域性や街並みの特



Fig-33

砂町銀座のシミュレーションによる修正景観-①

砂町銀座のシミュレーションによる修正景観-②

徴を表す上で重要な要素となる。したがって、赤系、紫系、黄系の色を用いる場合は、地域に定着した色彩から選択することがポイントになる。

2)大通りに面した街区

大通りに面した街区には、建築の壁面に取り付けられた広告看板と地域にない色が不適切に使用されているため、全体の街並み景観としての調和を欠いている場合が多い。

①駅前

日本各地の駅前や繁華街に見られる広告看板のほとんどの色は、地域の風土色には見られないグループの色で、かつ赤色の使い方が不適切なため、雑然として落着きのない景観となっている。

●色彩デザインのポイント

駅前には、駅を中心に、生活、産業、文化の中心地にふさわしい雰囲気があるようにする。

- ・建築外壁は、現況の色彩に近い黄系(9.0YR 8.6/1.8、9.1YR 7.6/1.4)で整える。
- ・広告看板のフレームカラーは、深い赤系(7.2R 4.6/9.1)、青系(2.3B 3.9/0.7)とする。
- ・アクセントカラーは、地域にある神社の鳥居の赤色(7.2R 4.6/9.1)を選定すると、下町文化の風情を感じさせる景観となる。
- ・建築壁面の広告看板を整理し、秩序を持たせる。

以上、四つのポイントから修正すると、告知情報が鮮明になると同時に、調和と風格のある街並みが形成される。

屋外広告物やサインは、街のコミュニケーションツールであり、その機能上から誘導性の高いものでなければならないが、多くの広告物やサインが無秩序に競い合うと、街並み全体が繁雑になり、サイン本来の役目も果たさなくなる恐れがある。上記の例に示すように、街並みを整然とすることで、サイン本来



Fig-34 亀戸駅前のシミュレーションによる修正景観